

近代日本の国際化とスコットランド

渡辺邦博

1. 何故スコットランドか？
2. グレート・ブリテン連合王国 (UK) 中のスコットランド
3. 明治政府の近代化路線—欧米からの手当たり次第の導入から、プロシア型の道へ—
4. 近代化に貢献したスコットランド
 - グラヴァー
 - ブラントン
 - バートン
 - 竹鶴政孝
5. ヒントあるいは教訓

1. 何故スコットランドか？

これまで私は、日本からジェット機で10数時間、何千マイルも離れた地球の反対側に位置するスコットランドを地盤とした経済学の勉強をしてきました。このことに私は、ある意味で夢中だったので、はじめてスコットランドに行った時、意外なほど東洋からの留学生が多いのに驚き、また特に中国から来ている留学生から、私に対して「何を学びに来たのか」と聞かれた時、アダム・スミスが教鞭をとった大学に経済学の勉強に来たと答えたところ、道路や建物を作るのが大切なことから、スミスなんてどうでもいいと言った反応に、もう一度驚いたような次第でした。この機会を借りて、これまでとは別の角度でスコットランドを考察してみたいと思います。

「国際化」と言う言い方自体が少しも新しいことではなくなった現在ですが、改めて「国際化」とは何かを考え、その上で、これまで勉強して来たスコットランドを題材にして、できれば私の外国、特にスコットランド研究を振り返ることができればと思っています。

2. グレート・ブリテン連合王国 (UK) 中のスコットランド

スコットランドと聞いて、ごく普通の日本人が思い浮かべるのはどんなことでしょうか。少し挙げてみましょう。

スコット (Scots) 族の形容詞であるスコッチ (Scotch) が「ウイスキー」の別名なのは、ほんとは奇妙なことですが、あまりに当たり前過ぎて誰も気が付かないほど常識になっているようです。バランタイン、シーバス・リーガル、カティ・サーク、フェイマス・グラウス、ジョニー・ウォーカー、オールド・パー、ホワイト・ホースなど、ひと昔前ほどではないにしてもアルコール好き人には、たまらないウイスキーの名前ではないでしょうか。「雪の山」を意味する「ベン・

ネビス」と言う海拔1344メートルでスコットランド最高峰の名を付したウイスキーもあります。このウイスキーを生産する蒸留所は、1989年からニッカ・ウイスキーが所有し、日英合作のスコッチが製造されています。

ハンバーガーのマクドナルドを想起されますか？「マック」は、誰々の息子という意味で、「ドナルド」の息子の意味です。カタカナ名のかかりのものがスコットランドに由来しています。ガルブレイス、マクミラン、マッケンジー、グラント、ブキャナン、マッカラム、マッキーバー、マクファーソン、マッキントッシュ、ステュアート、マクラウド、シンクレア、などはスコットランドの姓です。

「ゴルフ」に興味がある人には、「セント・アンドルーズ」のゴルフ・コースを思い浮かべるかも知れません。スコットランドなら、あの音「バグパイプ」を奏でる「タータンチェック」を身にまとった姿を挙げる人もあるでしょう。

少し年配の方なら、「螢の光」（元は「久しき昔」）、「思いいずれば」（「スコットランドの釣鐘草」）、「アニー・ローリー」、「故郷の空」（Comm' through the Rye）など明治10年代から20年代にかけて採択された文部省唱歌、さらにもっと詳しい人なら1745年のジャコバイトの反乱でイングランド軍に捕らえられたジャコバイト兵の悲哀を歌ったものとされる「ロソホ・ローモンド」を歌われるかも知れません¹。

もっと年少の人なら、ネス湖に棲むと言う怪獣「ネッシー」でしょうか。最近「ウォーター・ホース」という映画がありました。

スコットランドなしでは20世紀は成り立たない、とも言われることもあるそうですが、スコットランド人が発明したとされるものも少なくありません。

最近インターネット上で知ったので、慎重になるべきかも知れませんが、「マーマレード」の由来を見つけました。18世紀に大量のセビル・オレンジを積んだスペインの貨物船が、嵐を逃れてスコットランドのダンディー港に避難していたが、積み荷のオレンジが停泊中に腐食しないように売り出され、食料品商だったジェイムズ・キーラーがまるごと買い取りました。しかしそのオレンジは、そのまま食べるには苦味が強く、そこで妻のジャネットが砂糖煮にして、マーマレードを「発明」したのだと言う話があるのだそうです。マーマレードの語源には、ポルトガル語のマルメロ（Marmelo, 蜜+メロン）に由来するとの説もありますが、ジャネットが船からオレンジを運ぶのを手伝わせるために息子のメアーを呼んだ科白「Mair, Ma Lad!（メアー、私の息子よ!）」が転じたと言われていました。

グラスゴウ大学のアダム・スミスの庇護のもとで「蒸気機関」を改良したのは、ジェイムズ・ワット（James Watt, 1736-1819）であったのは有名な話でしょう。治療薬「ペニシリン」の発明者のアリグザンダ・フレミング（Sir Alexander Fleming, 1881-1955）、「モーション・ピ

¹ 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』岩波文庫、1971年。

クチャ（映画）」の発明者ディクソン（William Kennedy Laurie Dickson, 1860–1935）、最近では携帯という形にはなりましたが日常生活の必需品である「電話」の発明者グラハム・ベル（Alexander Graham Bell, 1849–1922）、史上はじめて「動く物体をテレビで遠距離放送」したジョン・ロジー・ベアード（John Logie Baird, 1888–1946）、インターネットの普及で少し影が薄くはなりましたが、情報の遠方への送信を行う「ファクシミリ」の発明者アリグザンダ・ベイン（Alexander Bain, 1811–1877）、「ガス灯」の先駆者ウィリアム・マードック（William Murdoch、綴りは Murdock とも、1754–1839）、電話と並んで現代生活に欠くことができない自動車に使用する「空気入りタイヤ」の開発者ジョン・ボイド・ダンロップ（John Boyd Dunlop, 1840–1921）など、驚くほど私たちの生活に密接に関わる技術がスコットランド出身者の工夫の結果であるとされています。

ついでながら、もう一つ私にとってはホットな新知見を紹介します。健康志向や、あるいは地球環境に優しい、化石燃料を使わない道具として見直されているものに自転車があります。自転車はいったい誰が発明したかについては、ルネサンスの天才レオナルド・ダ・ビンチ（Leonardo da Vinci, 本名 Leonardo di ser Piero da Vinci, 1452–1519）を主張するイタリア版自転車誕生説があるようです。2つ目はフランスに起源を求める考えです。18世紀の末、フランスのシブラック伯爵が「セレリフェール」を発明したと言う説。これはハンドルのない二輪車だったと言うことです。3つ目は、イギリス版自転車誕生説です。1839年にスコットランドのカークパトリック・マクミラン（Kirkpatrick Macmillan, 1812–1878）がペダルのついた自転車を発明したとされています。この説によるとそれ以前の自転車とされるものにはペダルがないので、自転車としては認めないということになります

偶然ながら、これに関する展示がオランダのナイメーヘン（Nijmegen）と言うドイツ国境に近い町の博物館にあると知り、ちょうどオランダに滞在しておられる知人に確認をお願いしました。まさしくインターネット時代を実感しますが、博物館を訪ねられた知人から添付ファイルで写真が届きました。それによると、確かにペダルで後輪を動かす自転車が写っています。同僚の語学の先生にお願いしてオランダ語の説明を日本語に訳していただきました²。ちなみに私は最近、ゴッホの逸品コレクションで有名な「クロラー・ミューラー美術館」で、自転車大国オランダの自転車にりましたが、その自転車はペダルを後ろに回すと車輪がストップしてブレーキとなって働く仕組みを備えていました。脇道にそれるのはこれくらいにして、スコットランドを正面から簡単に紹介します。（以上、マーマレード以外は、平凡社『世界百科事典』で確認できています。）

アングロ・サクソンよりも先住民であった、ケルト族スコット人の土地と言う意味のスコッ

² マクミランについてのナイメーヘン「ベロラマ博物館 Fietsmuseum, Velorama」の展示説明から。

1839年頃スコットランドの鍛冶屋カークパトリック・マクミランは棒でじかに後車軸につながったペダルで前へ進む乗り物を作った。蒸気機関車も同じ方法で動いていた。彼は3輪車を作り、そしてのちにそこから2輪車が生まれた。そのマクミランの自転車の原物は歳月の経過とともに失われてしまった。この模型は‘うわさによると’1890年頃に模倣して作られたものである。その設計図はまったく想像によるものである。

トランド (Scotland) は、北西ヨーロッパで、北緯55-60度と、緯度的にはサハリンやモスクワより北に位置しており、グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国 (United Kingdom) を構成する「国」(country) のひとつです。1707年の合邦法によってグレート・ブリテン王国が成立するまでは、独立した王国 (スコットランド王国) でありました。

スコットランドは、グレート・ブリテン島の北部3分の1を占め、南部でイングランドと国境を接しており、東方に北海、北西方向は大西洋、南西方向はノース海峽およびアイリッシュ海に接しています。また、本島と別に何百もの島から構成されています。主都はエディンバラで、スコットランド第二の都市です。最大の都市であるグラスゴウはグレーター・グラスゴウの中心であり、スコットランドの人口の40%がそこに集中しています。スコットランドの沿岸部は北大西洋および北海に接し、その海洋油田の石油埋蔵量はヨーロッパ随一とされています。

スコットランドの法制度、教育制度および裁判制度はイングランドやウェールズ、北アイルランドとは独立したものとなっており、そのために、国際私法上の一法域を構成しています。スコットランド法、教育制度およびスコットランド教会が連合王国成立後のスコットランドの文化および独自性の3つの基礎なのですが、スコットランドは独立国家ではなく、国際連合および欧州連合の直接の構成国でもありません。(「Wikipedia」による)

数字を挙げて、日本と面積がほぼ同程度の北海道と比較してみましょう。使用した資料は若干古いのですが、概念を得るには十分と思います³。面積は78,133平方キロで、北海道(83,452平方キロ)より少し狭く、人口512万3千人も北海道(568万3千人)より少し少なく、円換算年GDPは、12兆2,104億円で、これも北海道(19兆6,763億円)に足りません。一人当たりGDPも、2,38万円で、北海道(346万2千円)より少なく、失業率も7.3%で、市町村数が32ですから、私たちの国で推奨されている町村合併をすでに経験した後だと言えるのではないかと思います。

19世紀には、イングランドの産業革命の牽引車とも目された(グラスゴウでは、巨万の富をつぎ込んだ堅牢な建築物が今も多数見られます)スコットランドは、もともと厳しい自然条件、イングランドからの地理的遠隔性、いわゆる重厚長大産業の典型である、石炭・鉄鋼・造船・防衛産業における、後続国(戦後高度成長期の日本など)からの追い上げによって、1970-80年代には経済格差が拡大し、失業率が15%を超えた場合もありましたが、海外からの企業誘致(エディンバラとグラスゴウ間的高速道路を走ると、カシオ、ソニー、パナソニックなどの工場が見られます)の結果、エレクトロニクス産業の集積などで、エディンバラ、グラスゴウ周辺では、GDPの向上、失業率の低下がみられるようです。その経済政策は、市場全面依存ではなく、地域の特性を活かし、環境に配慮しつつ持続的な発展を模索していると評価されています。

最近ニュースとなったスコットランド関係の出来事には、1996年のスクーン・ストーン⁴返却、

³ 榎木勝彦、「スコットランドの分権改革に関する調査研究報告書」(平成15年3月)

⁴ 9世紀半ばにアルバ王国の始祖マカルピン王が、アーガイルから持って来させた石で、彼の後継者はこの石に座って即位すると定めたもの。富田理恵『スコットランド』山川出版社、2002年、14ページ。

1999年の議会権限委譲⁵、ブレア内閣の後がブラウン内閣（アダム・スミスの誕生地カコーディ出身）、2006年にイングランド銀行によって周知されたことですが、翌2007年から発行される新しい20ポンド紙幣の裏模様に、スコットランド出身のアダム・スミスが使用されたことなどでしょうか。最後の出来事は、1707年にイングランドと議会の合同を実施して以来ちょうど300年目であることを記念したと思われませんが、その背景には、新経済圏 EU に周りを取り囲まれた連合王国に、スコットランドを繋ぎ止めたいと言う意図を感じます。

スコットランドについて、ある程度の「理解」を持っていただいたと判断して、次に、私たちの祖先が、現在の私たちの基礎となった「近代化」に際して、スコットランドと、どのような関係を持ったのかに移りたいと思います。

3. 明治政府の近代化路線—欧米からの手当たり次第の導入から、プロシア型の道へ—

話を進めるのにあたり、日本の近代化についての本格的な説明が必要だとは思いますが、ここではごく簡単に済ませます。お隣の中国・清の敗北にショックを受けた明治維新前後のわが国の政府は、なんとしても国を富ませ、兵を強化するにはどうすればよいのかを焦眉の課題と考えていたとして話を進めます。

現在の日本にも痕跡が残っていますが、例えば道路での車両の左側通行、赤い郵便ポスト、大学の修業年限などをみますと、イングランドからの影響が指摘されます。郵便制度は、前島密の英国での研修経験が活かされていると言われますし、戦前の大学は3年制でイングランドの直接の影響が、戦後の大学は4年制ですが、これはむしろスコットランドの影響だそうです⁶。

今では影が薄くなりましたが、従来は医療制度にはドイツの影響が強かったとされます。「カルテ」(Karte) はドイツ語です。また、明治22年発布の大日本帝国憲法が、プロイセンをモデルとしたことも常識的には知られたことでしょう。

そうした中で、六法のひとつの刑法が、フランスの影響を受けているとも言われます⁷。

こうした日本人の外国文化の摂取の仕方に、日本的な点が指摘されます。私が手当たり次第と呼ぶゆえんです。

ここで、明治政府の近代化の試みの一つとして、明治4年からの記録『特命全権大使米欧回覧

⁵ 1997年に首相の座についたトニー・ブレアはスコットランド出身であった。このブレア政権のもと同年、再度の国民投票が行われ、スコットランド議会を創設することが可決された。スコットランドや北アイルランドで議会がつくられることが決まると、それまでの「イギリス＝イングランド」観は再検討を迫られ、イングランド人の間でも動揺がひろがったと言われます。

1997年、議会開会に先立ってスクーン・ストーンが（もともとあったパースでなく）エディンバラに返還され、1999年の総選挙で選ばれた129名の議員は「ジャコバイトの象徴である」白い薔薇を胸につけ、ホリールード宮殿の隣につくられた仮議事堂に会し、以下の宣言をもって開会した。「1707年3月25日以来、一時的に中断していたスコットランド議会を、ここに再開する」(Wiki)、と。

⁶ 森嶋通夫『イギリスと日本』岩波新書、1977年、129ページ。

⁷ 大久保泰甫『ボワソナアド・日本近代法の父』岩波新書、1977年。

実記』を一瞥したいと思います。実はこの中に、当時の日本政府の長期にわたる「外遊」の意図や、表題のスコットランドと日本の関係も出てきますので、ちょっと紹介させていただきます⁸。

岩倉使節団（いわくらしせつだん）とは、明治4年11月12日（陽暦では1871年12月23日）から明治6年（1873年）9月13日（明治6年以降は陽暦）まで、日本からアメリカ合衆国、ヨーロッパ諸国に派遣された使節団のことで、岩倉具視を正使とし、政府のトップや留学生を含む総勢107名で構成されていたとされています。（著名人でこの使節団に参加したのは、木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通などです）このメンバーについては、田中彰『岩倉使節団』講談社現代新書、13-24ページを参照して下さい。

（参考書としては、久米邦武編・田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』全5冊、岩波文庫版。これでは読み難いと言う方には、『現代語訳 特命全権大使米欧回覧実記』が、慶應義塾大学出版会から、2005年に5冊本で出版されています。）

使節団の目的として通常挙げられるのは、

1. 条約を結んでいる各国を訪問し、元首に国書を提出すること。
2. 江戸時代後期に諸外国と結ばれた不平等条約の改正（条約改正）のための予備交渉を行うこと。
3. 広く西洋文明を調査することであった、と言えるでしょう。

随所に組み込まれた挿絵を見ながら本文を読み進めると、彼らの文明に対する貪欲なまでの関心なり、渴望が伝わって来ます⁹。

その成果は何かとなると、「条約は結び損い金は捨て 世間へ大使何と岩倉」などと言った狂歌の題材にもされた面もあるのですが、明治政府の指導者たちが、西欧文明から直接影響を受けた内容が何であり、母国日本に及ぼした影響力がどの程度のものであったのかの詳細は、別途検討される課題として、多くの教訓を得たのは確実であったと考えられます¹⁰。

ここで関連するので、お話ししておくべきことは、文久3年（西暦1863年）に清国経由でロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジなどに留学した「長州の5人」（井上聞多〈馨〉、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔〈博文〉、野村弥吉〈後の井上勝〉）の1人、山尾庸三（1837-1917、1868年帰国後、工部権大丞はじめ工学関係の重職に就く）がスコットランドから明治維新直後に帰

⁸ 井上琢智氏による、幕末から明治にかけての近代化に関する最近の研究では、従来の通説のように、国会開設をめぐる政府内部に起こった民権派と保守派の軋轢、すなわち明治14年の政変以降、プロイセン流の立憲政治路線に転換したと言うよりも、岩倉使節団こそが、幕末以来の欧米文明の輸入の一転換期であるとも位置づけられますが、ここでは深入りしないことにします。井上琢智『黎明期日本の経済思想』日本評論社、2006年、第1章特に16、18、21、24ページを参照。

⁹ この点、田中、前掲書、40-46ページを参照。

¹⁰ 田中、前掲書、104ページ参照。

国して、使節団一行の出発前に、工部大学校「お雇い教師」採用権を持った伊藤博文にスコットランドの情報提供をしていたと考えられることでしょう¹¹。

アメリカを訪問した後、1872年8月のリヴァプール上陸後ロンドンを経由し、スコットランドにおいて岩倉使節団が訪問した先は、グラスゴウ、グリノック、エディンバラなどでありました¹²。

チェックランドは、スコットランドをも含む英国訪問で使節団が得た成果として、1) 英国産業の日本市場への支配力強化、2) 日本国民が自国を工業化する決意を一段と固めたこと、を挙げているが¹³、田中前掲書でも、使節団は、「イギリスの特質が貿易と工業にあり、この二つが結びつくことによって国家の富強を支えていることをいまや眼前にみた。」ことを再三にわたり強調しています¹⁴。

使節団の目的の枢軸とも言えるものが、スコットランド訪問の後一行によって確認されるとみなされるでしょう。

使節団一員の認識によると、小さな島国イギリスと日本は類似点を有すると同時に、経済力の点で大きく異なります。

「連合王国の総面積は約31万5,600平方キロ、人口は1871年の統計によると3,181万7,108人である。その国土の形や位置、面積それに人口はほとんどわが国とおなじようである。そこでこの国の人は日本のことをしばしば東洋の英国と呼ぶ。しかし、経済力を比較すれば、その隔たりはきわめて大きい。最近の精密な統計では、全英国の労働人口は891万9,000人で、役畜や船、車などの力は4,400万人分の労働力に匹敵し、蒸気機関の馬力は人口11人につき1馬力である。フランスはイギリスより国土は大きく経済力も豊かではあるが、機械力を併せて考えるとイギリスにおおいに劣るといふ。」現代語訳②、4ページ、岩波文庫②、22ページ¹⁵。

ただし、その相違のよって来たるところは、才能の差によるものではない。科学の発達を前

¹¹ 北 正巳『国際日本を拓いた人々』同文館、1984年、36ページ。また、経済学者ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) の友人であった、ロンドン・ユニヴァーシティ・カレッジのアリグザンダ・ウィリアムソン (Alexander W. Williamson, 1824-1904) 宅に下宿していた伊藤と井上とは、半年あまりの滞在を中断して1864年に帰国したが、山尾は残留3名のリーダーとして勉強を続けた。山尾は1866年秋にスコットランドの造船所に入り、工学技術を学んだ。さらに、夜は夜学のアンダーソン・カレッジで学び、明治維新直後に帰国、明治4年4月、その年の冬に米欧使節に出立する伊藤とともに、「工部大学校建設の建議」を提出した。他方で伊藤は、使節団の副使としてイギリスに歩を進め、工部大学校の教師採用のためにスコットランドに到来するが、その候補者が、山尾の同窓生でダイヤーとなったのである。北 正巳、前掲書、第2章「山尾庸三とヘンリー・ダイヤー」の第2節、とくに43ページ参照。また、チェックランド『日本の近代化とスコットランド』第3章「日本・スコットランド間の技術移転と文化交流」、井上、前掲書、第2章「幕末、明治初期イギリス留学生とユニヴァーシティ・カレッジ・コネクション」を参照。

¹² 一行を代表してこの回覧実記を執筆した歴史家・久米邦武が、イングランド、ウェールズ、スコットランドの3つに地域から成るグレート・ブリテンと、西の大きな島アイルランドとを総称して、「グレート・ブリテンおよびアイルランド連合王国」という。イングランドというのはブリテン島の南部の名称であり、全国の呼称ではない、と断っています。現代語訳②、4ページ、岩波文庫②、22ページ。

¹³ チェックランド、76ページ。

¹⁴ 田中、97-99ページ。

¹⁵ 「近代的戸籍制度の始まった1872年の日本の人口は、34,810,000人を超えた。」鬼頭 宏『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫、2000年、217ページ。

提として、人力を補佐する機械を利用した結果が異なるとの認識を得ています。下の引用は、スコットランドを離れて、ニューカスルに到着する前に述べられていることに注意したいと思います。スコットランドでの見聞が一行に残したものは、少なくないと判断されます。

「東洋が西洋に及ばないのは、才能が劣っているわけではない。知力が鈍いわけでもない。ただ、経済的な意識が乏しく、高尚な空理空論に日々を送っているからである。どういう例でこれを説明すればわかりやすいだろうか。たとえば、東洋の人が手工芸として作る品物は、きわめて風雅な味わいを持ち、卓抜なでき具合で西洋で珍重されている。これはその才能が優れていることを示している。彼らは人と機敏に対応し、きびきびとものを考え、新しいことを学びとる精神も旺盛で、当意即妙な知恵を発揮できる。これは彼らが敏活な知力を持っていることを証明している。西洋の人々はこれに対して、生活手段のすべてについてみな苦勞に苦勞を重ねたあげく、物理・化学・機械工学の三分野を発達させ、この学問に基づいて人力を補助するような機械類を工夫し、力を省くこと、集中すること、分かつこと、平均化することなどのテクニックを用いて、もともと劣っていた才知をそれらによってカバーした。そして、それらを利用し尽くすことによって今日の富強に達したのである。その大本といえは鉄と石炭があるだけである。」(現代訳② 291ページ、岩波文庫②、253-4ページ)

参考までに、岩倉使節団の行程の略年表を掲げておきます。また、編者久米邦武が、アメリカを出発して世界各国を回覧し、それらの国名にどのような漢字を充てているのかを拾い出し、本稿の末尾に掲げておきました。これも参考として下さい。

明治4年12月23日出発

ワシントン中心に、アメリカにはおよそ7ヶ月滞在。

明治5年7月3日、ボストンからリヴァプールへ、約10日間滞在して、7月13日ロンドンへ移動。

ロンドンに滞在の後、8月27日から10月8日までスコットランドに。

10月9日、ロンドン着。そのうち木戸は、ダブリンへ。イギリスには、4ヶ月滞在。

11月16日ロンドンからカレー経由、フランスへ。

明治6年2月17日にパリを立つ。フランスは、3ヶ月滞在。

2月17日からベルギーに、1週間滞在。

2月24日には、ロッテルダム経由でハーグへ。ハーグには、約10日滞在。

3月7日には、ドイツに向かう。3月9日からおよそ、3週間ベルリン滞在。

3月28日から、ロシア。セントペテルスブルグで、2週間

4月14日ペテルスブルグからデンマークへ。(木戸帰国)デンマークには、5日間。

4月18日コペン発、23日スウェーデンへ。スウェーデンには5日間。

4月29日、ストックホルムからリュウベック経由で、ハンブルグ5月1日。ドイツには7日間滞在。

5月7日ミュンヘン発、ヴェ罗纳経由でイタリア。

5月9日、フローレンス着、約24日間滞在。

6月2日、ヴェニス発。

6月3日、ウィーン着。オーストリアには10日間。

6月18日ザルツブルグ、ミュンヘン経由、チューリッヒ着19日。

スイスには、1ヶ月滞在。

7月15日、ジュネーヴ発、同日リヨン着。フランス滞在5日間。

7月20日、マルセイユから帰国。

7月22日、ナポリ。

9月6日、長崎帰国。

以上は、岩波文庫版を参考にして、作成した略年表である。各国での滞在期間に使節団なり、明治政府なりの、各国への関心の強弱を推測することができる。また、『回覧実記』本文の構成から同様の結論を得ることもできる。『回覧実記』全5編全100巻のうち、アメリカとイギリスが20巻、ドイツが10巻、フランス9巻、イタリア6巻、ロシア5巻、以下略、であるが、これをみると、イギリスへの関心がアメリカ同様に、他国のそれを圧倒している。田中前掲書、94ページ。田中は、当時日本は、たしかに独・伊に深い関心をもってはいたが、とくに当初から独・伊を「特別の国」（田中は、加藤周一による「日本人の世界像」は、明治初年の使節団の関心を、明治10年代以降の政府の志向と重ねあわせすぎ、と判断する）として、そこに過重な過大な比重をおいたものではない、としている。

4. 近代化に貢献したスコットランド

幕末から明治にかけての「お雇い外国人」の数的推移の研究成果によって、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、その他について、どの国からの人材が大きな役割を果たしたのかを推測された研究を参照しますと、いわゆる官庁による「活きた機械」の総雇用数はピークを迎えた明治7年以降減少に転ずるのですが、イギリスの占める割合がもっとも大きい、とされています¹⁶。

ただ、ここで私たちが追跡しようとしているスコットランド、ないしはスコットランド人と言っても、スコットランドという国には政治的な実体がないため、さらに明治のころはなおさら、スコットランド人と言う言葉が使われることはめったにありません。イギリス人とか、英国人と呼ばれるのが通例で、日本に残る記録からスコットランド人が何人来日したのかを見出すのは困難であるとされています¹⁷。

以下では、チェックランドに従って、スコットランド人を「スコットランドで生まれ教育を受けた人びと」という意味に解して、彼らが諸技術や専門的な知識をもって、新生日本の創出にいかに関わっていたのかを、紹介したいと思います。

すでに紹介しました「お雇い外国人」統計を見ますと、明治初年の官庁において工部省が雇用した外国人の中でイギリス人が占める割合が際立っており、分野で言えば、工学寮・鉱山寮・鉄道寮・灯台寮・電信寮・測量司がそれに該当します¹⁸。

他方で、明治19年の「帝国大学令」によって成立した当時わが国で唯一の大学「帝国大学」の時代は、「法科による官庁エリートの独占時代」の幕開けであると言われます¹⁹。その背景と

¹⁶ 井上、前掲書、13 - 20 ページ。

¹⁷ チェックランド、前掲書、40 - 41 ページ。

¹⁸ 井上、18 - 20 ページ。フランス人が多いのは、造船寮・製鉄寮・制作寮で、いわばイギリスとフランスの分業関係が成立していました。

¹⁹ 中山 茂『帝国大学の誕生』中公新書、1978年、88 ページ。

して、この時期が、経済的にいえば明治初年のさまざまな制度的実験、たとえば近代化のための工部省に対する巨額の投資が、松方緊縮財政下の整理期を経て産業革命に向かっている再編成を済ませ、近代的経済成長への軌道に乗る時期にあたっているからだとも評価されています²⁰。また、明治初年から、東京開成学校・東京医学校を併せた「東京大学」が成立する明治10年前後までの日本の科学界は、「現業官庁の時代」と言われます。近代国家としての体裁をととのえる緊急事業、電信網の設置、経度緯度の測量などを担当した現業官庁は、即座に成果のみられない教育を担当する「文部省」より実力を持ち、官庁がみずから外人技師を雇い、その役所の中に速成養成機関をつくって、実地にふり向けました。その最たるものが文明開化省ともいうべき「工部省」で、この「工部省」の設置（明治3年）には、伊藤博文がいちばん熱心で、みずから工部大輔、工部卿に任じていたとされています²¹。

諸外国と比べた明治日本の特徴点として、その初期における技術官の数と待遇の優位が際立っており、その技術官の最たるものが「工部省」であり、紆余曲折があっても、明治4年設置の工学寮を前身として、それが、明治10年には工部大学校となり、明治12年以来の卒業生の大半が、工部省管下で職に就いていることとなります²²。

ここで話ししようとするスコットランド人の日本への貢献は、まさしくこうした時代のことです。

○ グラヴァー、Glover, Thomas Blake (1838-1911)

グラヴァーは、ここで話すスコットランド人の中では、私たちによって最も知られている人物でしょう。

このグラヴァーは、スコットランド北東のプレーザーバラに生まれ、スコットランド人のコネクションの中で、ウィリアム・ジャーディン (William Jardine, 1784-1843) とジェイムズ・マセソン (James Matheson, 1796-1878) が設立した。上海のスコットランド系商社ジャーディン・マセソン商会 (1832年7月) に就職し、1859年開国直後の日本に来日、長崎で同商会の代理人の下で働きますが、2年後独立します。

商人としてのグラヴァーは、明治維新前には、長崎を拠点に、幕府と反幕府の諸藩の双方に、船舶、武器、弾薬を補給して、明治4年には破産の憂き目に遭うことにもなりました。

グラヴァーの日本への文化・技術導入の貢献を簡単に紹介しましょう²³。

まず、茶葉を焙煎加工して、輸出することを試みたこと。そのため、広東の茶の検査官フレ

²⁰ 中山、前掲書、24 ページ。

²¹ 中山、前掲書、80 ページ。

²² 中山、前掲書、75 ページ。

²³ 北正巳、前掲書、21 - 22 ページを参照。

デリック・リンガー (**Frederich Ringer**, 1838–1907) を招聘し、後にリンガーはグラヴァーの後継者となりました。

在留している西洋人の習慣を見込んで、長崎に初の家畜処理工場を建設しました。

1865年、上海博覧会に出品された蒸気機関車アイアン・デューク号を輸入して公開運転を行い、蒸気機関車の効用や将来性を啓発しましたが、これは明治5年の新橋・横浜の鉄道開通に7年も先立つことでありました。

佐賀県高島炭鉱に着目し、近代的採炭事業に着手、石炭の供給によって、産業・貿易の近代化に貢献しましたが、この石炭輸出は、のちに三菱商事などの事業に発展することとなりました。

慶応8年、薩摩の五代友厚らと共同して、蒸気を用いた日本初の洋式ドック「ソロバン・ドック」を建設したのですが、このドックが後に三菱長崎造船所の一部となりました。

新政府の貨幣改鋳のため大阪に造幣寮を興すに際して、大阪府権判事職の五代友厚の依頼で、建築技師ウォートルズ (**John Waters**) を推薦、機械類を香港から輸入し、明治4年に完成させました。

また、1885年「麒麟麦酒」の前身「ジャパン・ブリュアリー・カンパニー」の創設に参加しています。この会社の社章については、そのモデルが誰なのか、いろいろなエピソードがあるように言われています。同社のホームページをご覧くださいのがよいかと考えます。

グラヴァーの貢献は、本業外の面にも見出されます。1863年、長州藩の山尾庸三たち5名の若者が、マセソン商会の船で横浜から密航しました。ロンドンにたどり着いた彼らは、ジャーディン・マセソン商会のヒュー・マセソン (**Hugh M. Matheson**, 1821–1898) とロンドン大学のアリグザンダ・ウィリアムソンの庇護を受け、山尾はその後1866年から1868年までをグラスゴウのアンダーソン・カレッジの夜間学級に出席しました。山尾はスコットランド近郊の教育を受けた最初の日本人となった訳です。この山尾が受けたのと同じ学級で後述するダイヤーも学んでいました。スコットランド人は近代日本の工学教育の橋渡しをしたことにもなります²⁴。

彼は、本来の商人としてもリスクをいとわず果敢な商業政策を展開しましたが、文久2年(1862年) 薩摩藩島津久光の江戸からの帰途、横浜生麦村で、騎馬のまま行列を横切った英国人を殺傷した「生麦事件」に端を発する薩英戦争の結果としての薩摩・英国間の関係修復・強化に尽力して、倒幕から日本近代化の幕開きに大きくかかわった人物であった、ということもできます。

グラヴァー自身の言葉として「幕府の反逆者の中で、自分が最大の反逆者だった。私が日本のために一番貢献したのは、私がパークス英公使と薩長の壁をぶち壊したこと」を挙げる研究者もある²⁵ように、時代感覚に優れた大胆な発想の持ち主であったと言えるのかも知れません。

²⁴ チェックランド、前掲書、48ページ。

²⁵ 例えば、北 正巳、前掲書、19ページ。

彼は、淡路屋ツルと結婚しましたが、プッチーニのオペラ「蝶々夫人」のモデルとなったとも言われています。

○ ブラントン、Brunton, Richard Henry (1841—1901)

国際交流ということには、プラスとマイナスの側面があります。次に私たちは、必ずしも各方面からの賞賛の声にあふれている訳ではないそれを紹介します。明治日本のあゆみの特徴として、それまであらゆる方面でわが国のお手本であり続けた、隣国・清が欧米の植民地状態となったにもかかわらず、曲がりなりにも独立を維持し、あまつさえ近代化に成功したことが挙げられます。ここで紹介するブラントンは、その技術によって日本の各地にすばらしい業績を残しながら、その滞在期間中は、次に照会しますダイヤーなどに見られるような紳士的で寛容なところを示さず、日本人との摩擦が少なくなかった人物でありました。その原因は、彼自身は植民地行政官の伝統を引き継いでいたのにもかかわらず、当時の日本では、あらゆることの最終決定権が日本人の手にあると言うことを彼が受け入れられず、みずからの意思をどんな時でも主張したからと考えられます²⁶。まずこのことをお話した上で、技術者としてのブラントンの貢献に入りたいと思います。

ブラントンは、アバディーン南、ストーンヘイヴンのフェテレッソのマカルズと言うところの生まれで、アバディーン方面で鉄道技師として働いた後²⁷、ロンドンで職を得ていたのですが、折から列強との間で調印した条約に従い、航行の安全に必要な諸施設の設置に迫られた日本政府の照会を受けたエディンバラのスティーヴンソン兄弟社 (R.&T. Stevenson Brothers Co.) からの情報を得て、日本に赴くことになりました²⁸。このスティーヴンソン兄弟社のひとりトマスは、『宝島』の著者ロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850—94) の父であります。

当時の英国では、たいいていの技師は徒弟契約の下で仕事をしながら知識技術を身につけるのが普通で、理論的な研修はほとんどなかったと言われます。つまり当時の大学には工学分野の教育課程が整備されていなかったと言うことです。ただし、ロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジやグラスゴウ大学では工学技術の卒業生を輩出していました。

ブラントンは、任命されるとすぐにスコットランドで灯台建設の業務に精通する訓練を受け、二人の助手とともに、1868年8月に横浜にやってきました。折から徳川幕府が崩壊し、明治政府が権力を掌握したのですが、ブラントンの境遇には何も問題は生じませんでした。いわゆる「お雇い外国人」としての働きが始まります。

彼のキャラクタに由来する面が大きな上記の点は別として、ブラントンの事績をたどって見

²⁶ チェックランド、前掲書、104 ページ。

²⁷ チェックランド、前掲書、14 ページ。

²⁸ チェックランド、前掲書、104 ページ。

ます。

概して日本人との関係がよいとは言えなかった彼も、ハリー・パークス卿や、当時の神奈川県知事寺島宗則などの味方を得て、日本全国を調査航海し、現地日本の材料・職工を利用して、1876年に契約解除によって帰国するまでに、石廊崎、御前崎、納沙布岬、潮岬、友ヶ島などに34基の灯台、浮標、標識などを建設しました。その他、横浜居留地（現関内）の都市計画や、伊勢佐木町の鉄橋「吉田橋」の架橋、20マイル＝1インチの縮尺での日本地図の作成、日本初の電信線（東京・横浜、京都・大阪）の架設、新橋横浜間にモデル鉄道の建設を進言したことから「日本鉄道の生みの親」とも評価されています²⁹。

このブラントンの生誕150周年を祝って、ロンドンのウェスト・ノーウッド墓地にある彼の埋葬地に記念碑を建てると言う計画が横浜市当局によって実行されました³⁰。

一つ付言すると、ブラントンは4年間の奉職の後休暇をとってスコットランドに帰国したのですが、それはちょうど「岩倉使節団」のスコットランド訪問期間に当たっていました。ブラントンは、一行がニューカスルのアームストロング兵器工場を見学するのに加わっており、ガトリング銃の実射を証言しています³¹。

○ ダイヤー、Dyer, Henry (1848—1918)

明治初期の日本の学校教育では、アメリカやドイツの影響が強いとされますが、スコットランド人は教師として任命されたため、スコットランド特有の方針が明確な場合は少ないと言えます。ただし、例外もあります。それがダイヤーの場合です。

ヘンリー・ダイヤーは、ラナクシャのボズウェルにあるベルシルのミュアマドキンで生まれ、鉄工所で学んだ後、グラスゴウの鋳物工場の徒弟となりました。この徒弟期間中にダイヤーは、前述したように長州藩出身の山尾庸三が出席したのと同じアンダーソン・カレッジの夜間学級に通い、徒弟期間満了の後、グラスゴウ大学で5年間学び、成績抜群で卒業しました。私たちの知っているように、グラスゴウ大学は、アダム・スミスの同僚であった、医学のウィリアム・カレン (William Cullen, 1710—1790)、化学のジョゼフ・ブラック (Joseph Black, 1728—1799) 以来の伝統を持ち、その後グレート・ブリテンの他の大学に先駆けて1840年英国最初の工学講座を創設しており、理論と実習の結合によって充実した内容を誇っていました。

折から「岩倉使節団」副使としてスコットランド訪問中の伊藤博文は、ジャーディン・マセソン商会のヒュー・マセソンの親類でグラスゴウ大学初代工学教授ルイス・ゴードン (Lewis Gordon) の後任であったグラスゴウ大学工学教授マクウォーン・ランキン (William John Macquorn Rankine, 1820—1872) を紹介され、ランキンは、最後の定期試験を終了する前であっ

²⁹ チェックランド、前掲書、117 ページ。さらに、木村『スコットランド文化事典』も参照した。

³⁰ チェックランド、前掲書、118 ページ。

³¹ チェックランド、前掲書、82 ページ。

た24歳のダイヤーを推薦し、彼は日本政府の構想する工部大学校長に指名されることとなったのでした³²。

他方で、明治政府の工部省は、文部省が打ち立てた教育組織に属さない工部大学校の創設を法制化しており、この工学の頭となり、カレッジの構想を練ったのが山尾庸三でありました³³。

ダイヤーは、1873年日本への船中同僚たちと東京の大学校について構想を練ったと言われますが、日本で彼を迎えたのは、他でもないアンダーソン・カレッジの夜間教室における同席者だったのです³⁴。

ダイヤーが来日した時にはグラスゴウ大学での教育を終えたばかりだったのだから、彼にとってグラスゴウで受けた教育以外にモデルはなかったと思われます³⁵。工部大学校の組織編成がチューリヒのポリテクニクに基づいていたとも言われますが、着想と実際の適用とは異なるのであって、実際にダイヤーがチューリッヒを訪れたのは、10年の赴任を終えて帰国の途上1882年になってからであったとされています³⁶。

その頃チューリッヒにしかなかったこの種の学校で、ダイヤーは自ら土木工学と機械工学を担当しました。

その教育方針は、大陸の理論傾向と、イギリスの実地主義を折衷し、修学と実習を折半した「サンドイッチ・コース」を日本に導入したのでした³⁷。

工部大学校の課程は、1・2年 基礎履修 3・4年 午前英語による講義、午後赤羽工作所での技術見学 4・5年 すべて実習・公共事業現場の指導によって構成され、これが工業立国日本の基礎となったのです。この実現には、アンダーソン・カレッジでの同僚＝山尾庸三の協力が少なくない力となっていると思われます³⁸。

ダイヤーは、スコットランドの「エンジニア思想」を理想とし、教養・人格に優れた全人的エンジニアの育成を志向し、また、スポーツの奨励にも力を入れ、フットボールを日本に紹介したりもしています³⁹。

1882年の帰国に際し、政府は、勳三等旭日章と工部大学校名誉校長の称号を贈与いたしました。

帰国後の彼は、グラスゴウにおいて、特に日本との交流、留学生の面倒を見たのでした⁴⁰。

³² チェックランド、前掲書、66 ページ。

³³ チェックランド、前掲書、64-65 ページ。

³⁴ チェックランド、前掲書、90 ページ。

³⁵ チェックランド、前掲書、67 ページ。

³⁶ チェックランド、前掲書、54 ページ。

³⁷ チェックランド、前掲書、66 ページ。

³⁸ チェックランド、前掲書、92 ページ以下。また、ダイヤーについては、三好信浩『明治のエンジニア教育－日本とイギリスのちがいが－』、特に第1章「ダイヤーの実験－日本へのかけ橋－」を参照。

³⁹ 北 正巳、前掲書、119 ページ。

⁴⁰ 北、前掲書、98 ページ以下。

○ バートン、Burton, William Kinnimond (1856-99)

ダイヤーが明治政府の近代化路線をになった典型的な人物であるとする、バートンは少し異なるタイプのスコットランド人でした。彼には、専門の大学での工学教育の素養がないことが特徴であって、そのせいか、懸命な仕事ぶりにもかかわらずこれまでほとんど知られていません⁴¹。

バートンは、アバディーン出身の父親のジョン・ヒル・バートンと、エディンバラに育ったキャサリン・イネス (Katherine Innes) を母親として、1856年にエディンバラで生まれ、工業専門教育を受けた後、水力・機械技師の下で5年間の修業をしてからロンドンに出て、当時ロンドン衛生保全組合の事務局長をしていた母方の伯父コスモ・イネス (Cosmo Innes, 1798-1814) のもとで働き始めました。彼のこうした経歴がものを言っているバートンは、1887年「衛生工学教授および河川・泊渠・港湾を講ずる講師」として東京の帝国大学に勤務することとなりました。

誰が彼を日本政府に推薦したのかは詳らかではありませんが、1884年ロンドン万国衛生博覧会で、内務省衛生局の永井久一郎 (1852-1913、永井荷風の父) と出会い、コレラ対策に追われていた政府に推薦を受けたとも言われます⁴²。

赴任した翌年1888年には内務省衛生局の顧問になったのですが、これは急成長する日本の都市部の住民にとって衛生状態がきわめて重要であると政府が認識したことが背景にあります。清浄な飲料水の確保と汚水の処理とは、大都市にとって容易ならざる課題であったからです。バートンの事績を3つに別けて紹介しましょう。

バートンは、給水能力150万人の東京水道改良事業、24都市の上下水道・衛生事業の調査設計に従事したと言われていますが、北は北海道の函館、南は福岡・大牟田まで、1887年から98年まで水道設備に関する調査を行い、とりわけ日本の上水道の水質を8段階に分け、そのうちの3種類のみを「衛生的」とみなしていたことが、彼の残した書類から判明します。彼の退官にあたり、日本政府から勲四等旭日中綬章が贈与されています。

彼はまた、関東大震災で焼失するまでは浅草の名物だった通称「十二階」、「凌雲閣」を給水塔の原理を応用して設計しました。その高さは66メートル、10階建てのレンガ造りの八角塔で、上2階が木造作りで、日本初のエレベータを装備していたと言われます。これは、久保田万太郎や川端康成の筆にも記された記念碑的な建物でありました。

バートンは、日本に出発した1887年、ロンドンで、『現代の写真術』の第7版を出版していますが、彼は日本に写真技術を伝えた人でもあります。1889年日本写真協会が東京で創立されま

⁴¹ チェックランド、前掲書、119ページ。

⁴² 木村『スコットランド文化事典』による。

したが、それは彼と友人であった鉱山学・冶金学教授のジョン・ミルンの熱意によるものでした。彼は、英国の写真雑誌に、小川一真(1860-1929)、鹿島清兵衛(1866-1924)を紹介しましたが、この時の日本との連絡員が幼なじみの推理小説家コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, Arthur Ignatius Conan Doyle, 1859-1930) でありました。1891年、濃尾地震が起こった際に、この写真技術を活かして、ミルンとともに現地で本邦最初の断層写真を撮影したのも彼でした⁴³。

バートンは、9年の任期を勤めた後、日清戦争の結果割譲された台湾の公衆衛生の向上にも貢献した後、帰国準備の途中、マラリアと赤痢に罹り、1899年8月東京で没しました。

バートンに関係するもう一つのエピソードがあります。1862年、福沢諭吉(1835-1901)は日本人西洋訪問団の一員としてロンドンに滞在していた折、セント・ポール寺院近くのエディンバラの出版社W&R・チェーンバーズ書店で、*Political Economy, for Use in Schools, and for Private Instruction*, 1852『政治経済学、学校および個人教授用』などを購入しました。福沢自身が認めているように、『西洋事情外篇』における経済学に関する叙述の一部は、この書物に基づいていたのです。しかも、この『政治経済学』の著者は、今紹介しているバートンの父、ジョン・ヒル・バートン(John Hill Burton)でした。彼らは、経済思想・哲学の側面と、実用的な知識の双方で、日本国民に貢献したことになるのです⁴⁴。

○ 竹鶴政孝(1884-1979)

最後に、これまでのようなスコットランド人による業績ではなく、日本人の、時代も少し下って大正・昭和時代の、スコットランドと関わるそれを紹介します。それは、ニッカ・ウキスキーの創業者竹鶴政孝のことです。

竹鶴政孝は、広島県竹原市の醸造業の家の三男として生まれたので、幼い頃から酒に触れることが多く、自然と酒に興味を持ったと思われます。本家竹鶴酒造は今でも続いています。忠海中学に進み、通学時間が長いと言うので3年生進級のとき寮に入り、一つ下の下級生の池田勇人と交流をはじめ、池田の亡くなるまで交友が続いたと言うことです。大阪工業学校(後の旧制大阪工業大学、現在の大阪大学)醸造学科で学びますが、新しい酒洋酒に興味を持ち、先輩のついでで卒業を待たず、1916年当時洋酒業界で有名であった大阪市の摂津酒造に入社しました。

1918年竹鶴は、摂津酒造の国産ウイスキー製造計画のためグラスゴウに赴き、精力的に現場の実習に参加しました。滞在中に知り合いとなったリタ・カウンと1920年に結婚して、同年11月に神戸に戻ります。

⁴³ チェックランド、前掲書、152ページ。

⁴⁴ チェックランド、前掲書、135ページ。

スコットランドで得た知見を具体化しようとした矢先、不運にも世界恐慌が起こり摂津酒造のウイスキー国産化計画は頓挫してしまい、1922年竹鶴は退社、桃山中学で教鞭を執り化学を教えることとなりました。

1923年、大阪の洋酒販売業者寿屋が国産ウイスキー製造の計画を竹鶴に提案して、破格の年俸で1924年に入社が決まり、山崎の初代工場長となります。ここでの竹鶴の努力は、1929年初の国産ウイスキー「白札」となって実ります。ただ、経営者の鳥井信治郎との10年の契約が終了する頃、竹鶴は自らのウイスキー製造に乗り出し、北海道の余市に蒸留所を建設することになりました。

1934年に操業を開始しますが、サントリーとの競合を避けるためか、最初はリンゴ・ジュースを製造しました。この事業は、大日本果汁株式会社を言う名で開始されました。ウイスキー製造には彼も覚えもありましたが、ジュースの製造はそうでもなく、果汁100%に拘ったこともあって、事業は簡単には進みませんでした。

1940年にはウイスキーの出荷を開始し、リンゴ・ジュースの商品名「日果」をカタカナにして、「ニッカ・ウキスキー」と名づけられました。

1952年には社名をニッカ・ウキスキーに変更して、現在にいたっています。

チェックランドによると、「日本の蒸留ウイスキーとスコッチ・ウイスキーとのあいだに「親密な関係」が見られるのは、竹鶴政孝の断固たる決意によるものであった、ということのみとめなくてはならない」と言えるかも知れません⁴⁵。

平地の多いイングランドとは異なり、スコットランドでは山が珍しくないのですが、ベン・ネヴィスとはフォート・ウィリアム地区にそびえるイギリスの最高峰の山の名前です。この名前を付したウイスキーがあることはすでに申しました。いったん1983年に生産が停止され、その後ニッカ・ウキスキーが買収して生産を再開し、ウイスキー・ファンを楽しませています。

5. ヒントあるいは教訓

以上、スケールの大きな実業家グラヴァー、偏屈な技術者プラントン、工学教育の礎を築いたダイヤー、都市問題の先駆者パートン、そして海外に赴いてスコットランドの技術を学んだ竹鶴政孝、日本とスコットランドとの関係をいくつかの例をひきながらお話してきました。私はここでのテーマである「国際化」とは、国際的な視点に立って行動することであると考えますから、上記の人々は、それぞれがそうした行動を示したと考えます。「国際化」とは、異なる国籍を持つ人々が、「相互に相手を理解し」、その上で「協力と援助」を惜しまない状態となることであると思っております。

スコットランドが上記のような貢献ができたのはどうしてなのかという疑問には、次のよう

⁴⁵ チェックランド、前掲書、164-179 ページ。

な答えを考えています⁴⁶。

1. 教育、それも実学重視の伝統がスコットランドにはあったこと。1096年創建のオックスフォード、1209年創建のケンブリッジ大学が長らくイングランドの大学教育を独占して来ましたが、スコットランドでは、1411年にセント・アンドルーズ大学、1451年にグラスゴウ大学、1495年にアバディーン大学、1583年にはエディンバラ大学が、4つも創設されていたことはその国の教育熱心さを物語っていると思います。19世紀に、とりわけ古いイングランドの大学では中々導入されなかった工学に代表される実学が、グラスゴウ大学を典型としてスコットランドで重視されており、そこに学んだ日本人とスコットランド人の連携が成立したことが、近代化を模索する日本にとって、大変大きな力を持ったのではないのでしょうか。
2. 勤勉と儉約 スコットランドでは、プロテスタントによる徹底した宗教改革（→教会の破壊を参照）が行われました。その結果厳しい倫理感が培われて、スコットランド人の行動を規制するようになり、それが近代化を進める日本にとっても、密度の濃い教育を実現したり、灯台建設、都市・行政などの具体化にも有利に働いたのではないのでしょうか。
3. もう一つ挙げるとすれば、反骨精神でしょうか。スコットランドは、ながらくイングランドとの抗争の中で抑圧を余儀なくされて来ましたが、1707年の合邦以降は、イングランドに統合されてグレート・ブリテン王国の一部となりました。ちょうど日本が開国を実現した頃も、海外に打って出る航海士や商人はスコットランド人で、指揮監督するのがイングランド人という分業が成り立つ傾向があり、そうした流れの中で日本にもスコットランド人がやって来て、勤王・佐幕の争乱の中で、先見の明をもった施策が、大胆に採用されることにつながったと考えられます。

参考書

オリヴ・チェックランド／著 加藤詔士・宮田学／編訳『日本の近代化とスコットランド』玉川大学出版部、2004年。

泉 三郎『堂々たる日本人—知られざる岩倉使節団 この国のかたちと進路を決めた男たち—』祥伝社、1996年。

井上琢智『黎明期日本の経済思想』日本評論社、2007年。

木村正俊・中尾正史『スコットランド文化事典』原書房、2006年。

北 正巳『国際日本を拓いた人々—日本とスコットランドの絆—』同文館、1984年。

⁴⁶ 高橋哲雄『スコットランド 歴史を歩く』の第7章「〈実〉の世界をつくる人びと」が参考になった。18世紀のスコットランド固有の経済発展と経済学の成立との関係と言うテーマについては、田添京二、山崎怜氏らの見解がある。例えば、田添京二『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』八潮社、1990年、後篇第2章「18世紀末における経済学の体系化とスコットランド」、特に276 - 280ページのユニークな議論を参照して下さい。

久米邦武編・田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記』岩波文庫、1977-1982年。
『現代語訳 特命全権大使米欧回覧実記』が、慶應義塾大学出版会から、2005年に5冊本で出版。
三好信浩『明治のエンジニア教育-日本とイギリスのちがいで-』中公新書、1983年。
中山 茂『帝国大学の誕生-国際比較の中での東大-』中公新書、1978年。
杉山伸也『明治維新とイギリス商人-トマス・グラバーの生涯-』岩波新書、1993年。
高橋哲雄『スコットランド、歴史を歩く』岩波新書、2004年。
田中 彰『岩倉使節団』-明治維新のなかの米欧-講談社現代新書、1977年。
*本稿はもともと公開講座の下準備として用意されたので、表現が簡略されている箇所もある。
ご寛恕願いたい。

〈久米邦武の表記したアメリカ・ヨーロッパなどの地名〉

桑方斯西香哥 (桑港)	(サンフランシスコ)	日耳曼	(ゼルマン)
加利福尼亚	(カリフォルニア)		
落機	(ロッキー)	伊太利	(イタリー)
波士敦	(ボストン)		
費拉特費	(フィラデルフィア)	羅馬	(ローマ)
華盛頓	(ワシントン)	那不兒	(ナープルズ)
紐育	(ニューヨーク)	威尼斯	(ヴェネシア)
倫敦	(ロンドン)	奧太利	(オーストリア)
漫識特	(マンチェスタ)		
里味波	(リヴァプール)	維納	(ウィーン)
哥羅斯哥	(グラスゴー)		
巷丁堡	(エジンバラ)	匈加利	(ハンガリー)
北明翰	(バーミンガム)		
仏蘭西	(フランス)	瑞西	(スイス)
巴里	(パリ)	里昂	(リヨン)
白耳義	(ベルギー)		
荷蘭陀	(オランダ)	馬耳塞	(マルセイユ)
海牙	(ハーグ)	西班牙	(スペイン)
奄特坦	(ロッテルダム)	馬德里	(マトリツト)
魯士	(プロシア)	葡萄牙	(ポルトガル)
伯林	(ベルリン)	里斯奔	(リスボン)
露西亞	(ロシア)	阿刺伯	(アラビア)
聖彼得堡	(セントペートルボルク)	亜丁	(アデン)
		孟買府	(ボンベイ)
噠馬	(デンマルク)	錫蘭	(セイロン)
瑞典	(スウェーデン)	榜葛刺	(ベンガル)
		蘇莫答刺	(スマトラ)

滿刺加	(マラッカ)
新嘉坡	(シンガポール)
柴混	(サイゴン)
柬埔寨	(カンボジア)
馬尼刺	(マニラ)
香港	(ホンコン)
上海	(シャンハイ)
秘露	(ペルー)
加拿陀	(カナダ)
爪哇	(ジャワ)
埃及	(エジプト)
亞歷山大府	(アレキサンドリア)
蘇士	(スエズ)
西奈	(シナイ)
豪斯多拉利	(オーストラリア)
智利	(チリ)
希臘	(ギリシア)
土耳其	(トルコ)
伯刺西爾	(ブラジル)
那威	(ノルウエー)
英吉利	(イギリス)
不列顛	(ブリテン)
綠威	(グリニッチ)
英倫	(イングランド)
威爾斯	(ウエールズ)
蘇格蘭	(スコットランド)
愛蘭	(アイルランド)
都伯林	(ダブリン)